

## 実習の事前指導の充実をめざして

— 1 日見学実習・土曜参加実習から —

大岩みちの ・ 吉田 龍宏

(岡崎女子短期大学) (岡崎女子短期大学)

### 1 はじめに

保育者養成校の実習担当の教員にとって、学生の資質向上のために授業やカリキュラムに何をどのように組み込んでいくかということは常に頭から離れない課題である。この課題を考える際、「最近の学生は…」という表現の中からいくつかの糸口を見つけることができる。例えば、「並んで順番を待たずにすぐ座り込んでしまう」、「正しい言葉遣いができず相手や立場をわきまえた物言いができない」、「飲んだり食べたりしながら歩く」、「掃除をしたがらず箒の使い方もわからない」などがある。これらは学生のこれまでの生活経験の積み重ねや生活環境のいかんによるものである。さらに、兄弟や家族の数が少なくなったことや近所の子ども同士による遊び集団がなくなったと言われて久しいが、学生の中には人と関わる経験が乏しく、人との関わりをうまく保てずに途中で挫折してしまう者も少なくない。これらは保育者を目指す学生にとっては、かなり重要な問題である。そのため子ども、保護者、職員間の関わりが求められる保育現場に立つ前に、子ども達や保育者達とのふれあいを通して、保育という仕事を認識していくために短大生が実習で何をどのように学び、どう進めていくべきであるのかを考え、岡崎女子短期大学では平成 14・15 年度は、実習の事前学習として 1 日見学実習・土曜参加実習を行った。

1 日見学実習は 1 年生約 250 名を対象に 9 月に付属の 3 幼稚園 21 クラスで行った。時間は 9 時から 16 時まで、ねらいは「園生活の一日の流れを知る」「保育者の仕事を知る」とした。その後、10・11・12 月の土曜日を利用して 1 日見学実習を行った同じクラスで 9 時から 12 時までの実習の中、20～30 分程度の子どもの遊びを考え、部分的に保育実践を経験したものである。

これら 1 日見学実習と土曜参加実習を通して、学生の意識や態度に変化を感じたことから、具体的にどのような変化が見られ、意識がどの程度高まっているのか調べることを本研究の目的とする。

### 2 研究の方法

1 日見学実習後の反省レポートとその後の土曜参加実習の準備・反省及びアンケート調査により、学

生の意識や姿について以下の点で検討をした。

- ①生活習慣や態度への気づき
- ②子どもの姿についての気づきや疑問
- ③保育者の仕事理解
- ④実習中の学生の学び方
- ⑤次回の実習への課題意識

### 3 結果と考察

#### ①生活習慣や態度への気づきについて

予め、1 日見学実習並びに土曜参加実習の前に授業時に服装や態度について指導を行った。その結果、多くの学生が動きやすい服装や、アクセサリ、髪形についての注意を、自ら行うことができた。また、他の実習生や保育者を見て、より保育に適した服装、場面に応じた服装の必要を感じ取った学生も多くいることが、反省レポートやアンケートからわかった。特にアクセサリやマニキュアについては、「自分が事前に十分配慮が足りなかったため、当日までにきれいに落とすことができなかった」や「担任の先生がきちんとした身なりをされていて、とてもよい印象を受けた」といった意見もあり、今回の 1 日半の実習において、学生の意識の中に職業人としての保育者にふさわしい身だしなみについて、一定の意識づけをすることができたと考えられる。

#### ②子どもの姿についての気づきや疑問

気づいたことや感動したこととして、子どもたちが学生の予想を超えて、成長している姿を見たり、友達と協力して遊ぶ姿に気づいたりすることなどを挙げる学生が多かった。

また疑問に感じたこととして特に出されたのは、けんかの場面や子どもが先生の話を聞かないとき、どのように対応すればよいのかわからないという意見が多かった。

これまで中学や高校で保育体験をしたことのある者がほとんどではあるが、実際に子どもたちの生活や育ちをじっくりと見て、「自分ならどのようにかかわればよいのか」という、保育者としてのまなざしが、今回の 1 日半の実習の中で芽生えてきていると考えられる。学生の見方はまだ印象や思い込みの域を出ないものも多いが、子どもにか

かわろうとする者としての見方が出始めていることは、今後の実習での幼児理解に向けて、一步前進しているのではないだろうか。

### ③保育者の仕事理解

1日見学実習では「1日流れを知ることができた」と応える学生がいる反面、子どもとの遊びに集中してしまい、子どもと保育者とのかかわりまで目が届かなかつたと応える学生も多くいた。

しかし、土曜参加実習では、学生が自ら計画を立てて実践し、保育終了後に担任より講評をいただくという中で、援助や環境準備など、保育者の仕事を実感として捉えることができたことが、記録から明らかとなった。特に早い時期に土曜参加実習を体験した学生は、これから実習をする学生グループの準備の様子を見て、自分たちが実習で指導されたことを基に、同じクラスの学生の計画した活動に対して、授業時に例えば「歌を歌ってから話を始めると子ども達が落ち着いて話を聞くことができる」といったコメントをしていた。こうした学生の活動に対する見方の変化は、学生が実習を通して保育者の役割を少しずつ感じ取って、理解した結果によるものである。

### ④実習中の学生の学び方

レポートやアンケートには「周りの友達の動きを見て、自分もしてみようと思い、実行した。」「担任の先生がされているのを見て、自分から積極的に動こうと努力した。」という表現を見ることができる。

保育の実践は、身体行為を伴うものが多い。したがって、保育経験の少ない学生が、実習を通して保育者から保育を学ぶとき、身体行為そのもの、すなわち保育者が実践する姿や、その場面、あるいはその実践の直後に、必要に応じて実際の姿を基に説明を受けることを通して学ぶことが多い。つまり、実習における学びは、子どもの遊びと同様に、観察学習と機会教授によるところが大きいのである。今回1クラスに3～5名で入ったことにより、保育者からも、また友達同士でも、このような観察学習や機会教授ができたことは、これからの実習において学生が学び方を知る上で貴重な体験である。

### ⑤次回の実習への課題意識

今回は課題として「園生活の一日の流れを知る」「保育者の仕事を知る」の2点が示されているが、この課題の達成についての問いに対する答えで多

くの学生に共通していることは、子どもを見ることとかかわることの両立や保育者の動きを見ることの難しさである。しかし、こうした課題意識は、次に5日間連続して行う見学実習に向けて、自らの課題として学生の自覚に結びついたものと考えられる。実際に、見学実習に向けての学生の課題には、上述した内容が課題として出されている。

### 4 まとめ

以上5つの視点から実習における学生の学びを検討した。その結果、子ども姿や保育者の仕事、実習での学び方など、多様な学びを1日見学実習、並びに土曜参加実習で得ていることが明らかとなった。そしてこれらの学びは、本学では次に行われる付属幼稚園での5日間の見学実習につながるものであり、このような実習が本実習の準備段階として有効であることが明らかとなった。

実習の経験は、少ないよりは多いほうがよいといわれる。確かに学生にとっては、実際に子どもの遊びや保育者の仕事に触れる経験がとても大切である。特に、子どもとの触れ合う経験が少なく、生活経験も少ない学生にとって、これから保育を大学等で学ぶためにも、こうした経験が必要であろう。

そのために、こうした実習においては、学生が、何を、どのように学び、次にどう活かしていけばよいのか、学べなかつた点を次回はどうしたいと考えているかなど、自分自身の意識の中に明確にしておかなければならない。そのためには、保育者養成校の教員自身も、学生の学びに対する実態把握、すなわち「学生理解」が一層求められるのである。

そのための一つの有効な資料として、学生の記録がある。記録の中で焦点を当てる部分の選択の仕方と取上げたエピソードの捉え方に加えて、如何にしっかりと子どもや保育者、あるいは園全体や仕事内容を見ようとしたかを検討することを通して、学生の学びが明らかになってくる。そのためには、今回のレポートやアンケート調査からわかったように記録が大きな意味を成すことは言うまでもない。

実習の事前学習を充実させることによって実習での学生の育ちを確実にしたいという願いを持った取組みは、学生の授業態度や普通の学生生活においてもその成果があったことを示しているが、子どもとのふれあいに関しては、大きく不足を感じる。学生一人一人の意欲や態度に結びつくような事前学習が実習に活き、卒業後の仕事に活かされるようなカリキュラムの検討が今後の大きな課題である。